

登場人物

星川 あかり（ほしかわ あかり）

二十五歳

社会人三年目。

橘（たちばな）

二十八歳

外見：がっちりとした体格で、身長は180cmを超える。引き締まった筋肉が、服の上からでもわかる。短髪で、精悍な顔立ち。日焼けした肌が健康的。

性格：穏やかで、包容力がある。誰にでも優しく、誠実。仕事熱心で、自分の店と商品に誇りを持っている。

職業：スポーツショップ経営

趣味：ランニング、筋トレ、スポーツ観戦

＊ ＊ ＊

「はあ、はあ……よし、ちょっと休憩っ」

せっかくの休日だけど、ちゃんと早起きして今朝もランニング。今週から始めたばかりで、まだ少ししか走ってないのにすでにヘトヘト。

（いつ成果が出るんだろう……）

社会人になって3年目。座り仕事なので運動不足なのは明白で、学生の頃はほっといても維持できていた体系が少しずつ崩れているのを感じていた。まだ見ぬ彼氏に見せても恥ずかしくないように、改善したくて始めたんだけど、なかなか道のりは険しい。

いつもの休憩スポット、公園のベンチに腰を下ろす。ひんやりとした木の感触が、火照った体に気持ちいい。スポーツドリンクを一口飲んで、大きく息を吐いた。ダイエットの成果はまだ出ていないけど、こうして運動すると少し自分が開放的になる気がして、心地よい。

…タッタタッタと軽い足音が近づいてくる。誰か来るな、とは思ってたけど、まさか隣

に座るとは思わなくて、ちょっとドキッとした。

「おはようございます。……あの、いつもこの辺り、すれ違いますよね？」

えっ……？低くて、でも耳に心地いい声。恐る恐る横を見ると、何度か見かけたことのある、あの人だ。がっちりした体格で、見るからにスポーツマン。……しかも、イケメン。

「あ、はい……おはようございます」

なんとか声を出したけど、心臓がドキドキしてる。

「最近ランニング始められましたよね？」

（え、なんで分かるの？……あ、やっぱりこの格好、変だよな……）

そう、ランニングを始めようと思ったのはいいものの、まともなウェアなんか持っていないはずもなく、とりあえず実家からパジャマにしようと思って持ってきていた高校時代のジャージを着用していたのだ。

（こんな、高校のジャージ姿、見られるの恥ずかしいな……）

「あ、はい……最近ちょっと、運動不足と、あと、その……ダイエット、みたいな……」

しどろもどろになっちゃう私を見て、彼は「ふふっ」と優しく笑った。その笑顔が、太陽みたいに眩しくて、心臓がキュンと鳴った。

「十分すらっとしてて、ダイエットなんかする必要なさそうですけど」

「いや、それが脱いだら意外と……って、すみません」

「いえいえ。でも痩せる必要なくても、運動することは大切ですから、続けてくださいね」  
「はい！走ってみるとすごく気持ちよかったので、続けるつもりです」

それはよかった、と彼はまた優しく笑った。笑うとくしやりとなくなる目が可愛くて、ついつい心を許してしまいそうになる。

「実は、僕、この近くでスポーツショップを経営してるんですよ。橘って言います」

彼……橘さんは、そう言って名刺を差し出してきた。「Active Style」……あ、駅前到新しくできた、あのおしゃれなお店だ。若そうに見えるのに、お店を経営しているなんて……すごい。

「あ、星川あかりです……」

私は名乗ったものの、ただの会社員であることが少し恥ずかしくて、少し小さくなってしまふ。

「星川さん、よかったら、うちの店でウェアとか、見ていきませんか？ランニング用の、色々あるんですよ」

「あ、でも、ご迷惑になったらいけないし……」

「ああ、実は今日、店休日なんです。店の掃除でもしようかと思ってたんですけど、でも、もし星川さんが良ければ、ご説明しますよ。始めたばかりだと、何を選べばいいか、迷っちゃいますよね」

彼の言葉に、胸がじんわりと温かくなる。店休日なのに、私のために？それに、こんなにカッコいい人のお店に行けるなんて…。

「えっと…でも、そんな、ご迷惑じゃ…」

「迷惑なんかじゃないですよ。むしろ、こうやって知り合えたのも、何かの縁ですし。…ね？」

彼の優しい笑顔と、ちょっと強引な誘い。

…断る理由なんて、どこにもなかった。

「どうぞ、こちらです」

橘さんに案内されてお店の中へ入ると、外から見た以上におしゃれで、広々とした空間が広がっていた。色とりどりのウェアやシューズ、小物……どれもこれも素敵で、目がキラキラしちゃう。

「すごい……！こんなにおしゃれなスポーツショップ初めてきました」

思わず声に出すと、橘さんは少し照れたように笑った。

「ありがとうございます。若い人や女性にも運動してほしくて、内装やデザインには少しこだわっているんです。……あ、じゃあウェアを見てみますか？ 星川さんのサイズだと、この辺りかな」

彼が指差す方には、女性向けのランニングウェアがずらりと並んでいる。ウインドブレーカーのようなアウターや、Tシャツのようなウェア、スパッツタイプなど様々なものがある。

「あ、これ可愛い……でも、こんなの着て走るの、ちょっと恥ずかしいかも……」

こんなに可愛くて本格的なウェア、私にはまだ早い気がする。

「そんなことないですよ。形から入るのって結構やる気向上のために大切ですよ。それに、

星川さん可愛らしいから、きつと似合います！」

まったく笑顔で、橘さんは優しく微笑む。

その笑顔に、ドキドキが止まらない。可愛いって…嫌味のない言い方に、お世辞だと思うけど、ドキドキしてしまう。こんな素敵な人が、私のために時間を作ってくれてるなんて…「ランニング始めてよかった…」

「え？どうしました？」

「い、いえ。独り言です」

（……それにしても、橘さん、本当にカッコいいな…。こんな人が彼氏だったら、毎日ドキドキしっぱなしだろうな…）

「…あの、実はですね、星川さん」

橘さんが、少し真剣な表情で私を見た。

（な、なんだろう……まさか……）

素敵な橘さんと、お店で二人きり。漠然とした期待が胸に押し寄せる。

「はい…なんででしょうか？」

「実は今、メーカーさんと共同で、女性向けの新しいランニングウェアを開発してるんです。もしよければ、そのテストモデルを、星川さんにやっていただけないかな、と思って…」

（テストモデル……？私が……？）

少し肩透かしを食らったような残念な思いを感じつつ、その申し出にも浮足立ってしま  
う。

「えっ、私ですか……？ でも、私、ランニング始めたばかりですし、モデルにならないと思  
いますけど……」

「もちろん、無理強いはしません。でも、星川さんのような初心者の方の意見も、すごく貴  
重なんです。それに……」

彼は少し言葉を区切って、私の目をじっと見つめた。

「星川さんに、ぜひ着てみてほしい、って思ったんです」

その言葉に、胸がキュンと高鳴った。

（……私に、着てほしい……？断るのも……申し訳ないよね）

「……わかりました。私でよければ、ぜひ、やらせてください！」

「本当ですか？ありがとうございます！」

橘さんはこれまでのかっこいい感じとは違い、少しでも幼さも感じさせるような素直な  
声で喜んでくれた。

「こんなに親切にしてもらってばかりだと申し訳ないですし、橘さんの力になれたら私も嬉



しいです」

「ありがとうございます！なかなか女性に頼みづらくて、困ってたんです。じゃあお礼にウェアをひとつプレゼントしますよ！」

「え、そ、そんな！わるいです！」

「大丈夫です。本当に、貴重なモデルさんですから」

そう言いながら橘さんはレジカウんターの足元からビニール袋を取り出した。

「これです。あちらの試着ルームで着用していただけますか？」

「わかりました！わあ、可愛い色ですね」

ウェアをしっかりと見てみると、お店の名前の横に超有名なスポーツブランドが刺繍してある。

「え…？ ZEEK とのコラボなんですか？」

「はい、まあ…ちょっとツテがありました」

（橘さんすごい…人脈もあるんだ…）

「このウェアは下半身用なのですが、しっかりと腰と脚をホールドしてくれるんです。ただホールド力が強いとお尻に食い込んだりするのが気になるという女性の意見が多かったのでおしりはゆとりを保ちつつ、ホールド力もしっかりあるというものを開発したんですよ」

（なるほど。たしかにお尻の食い込みはパンツでもズボンでも気になるよね……）

「女性目線がしっかりわかっていて、素敵です！」

「ありがとうございます」

思ったことがついつい口に出てしまう。言ってから恥ずかしくなったが、橘さんが素直に受け止めてくれるから伝えてよかったなと思った。私はもう橘さんのすべてにドキドキしてしまいながら、試着室へ入って、カーテンを閉めた。

「それじゃあ、着替え終わったら声かけてくださいね」

「わかりました！」

ウキウキしながらぺろんと広げたウェアは、想定していたものよりもずっと薄くて小さいものだった。水泳選手が履いているようなひざ丈くらいのスパッツみたいなもので、なにより、すごく生地が薄い。

「あ、あの、橘さん。これって、下着の上から着るんでしょうか？」

「あ、アンダーウェアとしての機能も兼ねているので、下着も必要ないですよ」

「え、あっ、そうなんです。でも、ちょっと恥ずかしいっていうか……」

「シルエットが気になる方は、上からズボンやジャージを履く方もいますよ」

「なるほど！わかりました」

（そうだね、これを履いて外に出るなんて、かなり恥ずかしい…）

上からズボンを履けるなら安心だ。私はズボンとパンツを脱いで、ウェアを履いてみた。「わ、すごい…」

橘さんの言う通り、お尻の部分はしめつけがきつくなく楽なのに、腰や足、ひざはしっかりとホールド力があり、全然ふらつかない。これなら毎朝ランニングしても、怪我をするとはなさそうだ。それに質感もかなりスベスベで肌触りもよく、来ているだけで心地よい。（さすが、橘さんが開発したウェア♡でもこれ……）

そう、着心地は最高によいのだが、鏡に映る自分を見て赤面する。薄いうえにしっかりと肌にフィットしているので、体のラインがかなりしっかり見えている。太ももや股間のむちむち感もそのまま見えてしまう。

「これはズボン着用必須ね…」

自分の下半身を眺めていると、橘さんから声がかかった。

「大丈夫ですか？問題なく着用できました？」

「あ、はい、履けたんですけど、でもっ」

橘さんに見られるのは恥ずかしい。そう思って焦っていたが、無駄だった。

「よかったです！どんな感じですか？」

と、橘さんがシャッとカーテンを開けた。

「あ、あの」

思わず手で股間や足を隠そうとしてしまう。

「おおー。サイズぴったりみたいです。デザインもよくお似合いです」

「あ、ありがとうございます。本当に、ぴったりすぎるくらいぴったりで……」

「着用感はどうですか？」

「あ、すごくいいです！材質も気持ちいいし、すごく支えてくれるので、今すぐにも走り

出したい感じですよ！」

「それはよかった。なんならそれもプレゼントしますよ」

「えっ!? 本当ですか？♡うれしいです♡」

橘さんと話していると、いつの間にか恥ずかしさを忘れてはしゃいでいた。

「それじゃあ、少し歩いてみた感じも感想聞きたいので、店内を少し歩いてもらえますか？」

「はい！」

そう言って足を一步踏み出した瞬間だった。

「ああうっ♡」

私はあそこ…クリトリスにざわざわとした刺激を感じ、思わず声が出してしまった。

（な、なに!? どうして?）

「星川さん、大丈夫ですか?」

橘さんに今の声を聞かれたと思うと、頭が沸騰しそうなくらい熱くなる。

「あ、ごめんなさい、大丈夫だと思います…」

平気なふりをして歩き出すが、一歩踏み出すたびにまたクリトリスに刺激が襲う。

「あひっ♡うっ…♡あ、んっ…♡」

一歩一歩足を動かすたびに、ウェアの股間部分がクリを押し込むように刺激する。

（ちよ、ちよどこクリのいいところにあたるっ♡食い込んだ布が直接クリにざらざらして擦れちゃう♡）

「あっ♡や…っ♡だめ…あるけない…」

「どうしました?」

「いや、あの、ちよっと体に合わないみたいで……」

「そうなんですか!? どこが合わないですか!？」

「いや、合わないというか……ちよっと股間のサポートが強いみたいで」

自分の開発した製品が合わないと言われ、傷つきそうになっている橘さんを見て、何かフォローしなければと思いつい本音が出てしまう。

「あ、そうでしたか。お尻にゆとりを持たせるために前方のサポートを強くしたので、ちょっと強いと感じられるかもしれませんね」

「はあ……ちょっと強いというレベルでは……」

「でもそのサポートがあるから走りやすいはずなので！すぐに慣れると思うので、もう少し歩いてみましょう！」

笑顔で押し切られ、断ることができなかった。

「わ、わかりました……じゃあ……がんばります……」

仕方なしに再び歩こうとするが、一步一步、トントンと振動がくるたびに、さらにウェアの締め上げは強くなり、どんどんクリトリスを押し込む力が強くなる。

「ひっ♡あっ♡…あうっ♡」

（もうだめ…走るところか歩くのも無理……）

「あぁっ…♡」

私は押し寄せる快感に力が入らなくなり、ついに立つこともままならず倒れそうになっ  
てしまう。

「おっと！だ、大丈夫ですか？」

橘さんが私を受け止めてくれた。私は腰が引けて足がびくびくと震えて、生まれたての

小鹿のような状態で橘さんに寄りかかってしまった。

「はあ……はあ……だ、大丈夫ですごめんなさい」

答えながら橘さんの顔を見上げると、橘さんの目線は私の後方をじっと見ていた。私も追って振り返ると、そこには試着確認用の鏡があった。

（え……うそ……っ！）

鏡には、しっかりと濃くシミができている、私の突き出したお尻が映っていた。

「ありやうや……星川さん……」

「あ、ごめんなさい。これは違うくて、あの……」

私は橘さんによりかかったまま何か言い訳をしようとするが、言うべきことが見つからない。

「ちよつと締め付けが強すぎましたか？」

橘さんの声は相変わらず優しいけど、少し悪戯っぽくなっている。恥ずかしくて心臓が口から飛び出しそうだ。平静を装おうと思っても、心臓がドキドキして、今すぐ逃げ出さくなる。

「ご、ごめんなさい。私の身体とは合わなかったみたいで」

「そうですか……じゃあちよつと、どこが合っていないのか確認しますね」

真剣な声が首筋に降ってくる。私を左手で支えたまま、右手でそっとシミができた部分をなぞる。

「ひゃっ!?♡…た、橘さんっ!だめです!♡」

「だめじゃないですよ。しっかりと開発のために、確認させてください」

愉し気に答えながら、橘さんの指が優しくウェア越しにぐいぐいとおまんこを刺激する。

「あっ♡あっ…♡そんなにつよくしちゃ♡だめですうっ」

「なるほど。ここが刺激されているわけですね」

「や、刺激されたのはその少し上で……」

（って、何正直に伝えてるの!?)

自分がバカ真面目すぎて泣きそうになる。

「上?こっちですか?」

「んああ…♡♡♡♡♡」

ウェア越しにクリをぐりゅっと押し込まれ、私は体を跳ね上げて声を上げてしまう。ウェアにざらざらと刺激されるのも快感だったが、指で押し込まれる刺激は強烈で、甘い痺れにじゅん♡と愛液がさらに滲んでしまう。

「はあ…はあ…♡♡そこが、ちよっと刺激されててえ……♡」



「なるほど、星川さんはここが敏感な方なんですネ」

人差し指と中指で挟んだり押し込んだり、すりすりとかりの形を確かめられるように刺激される。

「ひゃう…♡あ、やっ…だめです♡」

「なるほど、ウェアがクリトリスに擦れて感じてしまったのか…それはよくないですね」

「ひあ…♡クリだめ…っぐりぐりしないでえ♡」

「では…もっと強く食い込ませてみましょうか」

「あぁう…っ!?♡」

ウェアの股間の部分がぐいっ♡とクリを締め上げ、指で押されるのとはまた違う刺激が襲う。

「星川さん、どうですか？ クリにウェアが食い込んで、どんな気分ですか？」

「んい…っ♡♡♡♡♡」

「星川さん、腰が浮いてますよ」

「だ、だって…え♡あっ♡んうっ…!き、きもちい♡クリきもちよすぎるの…っ♡」

私はいつの間にか足をもピンと伸ばしつま先立ちになっていた。少しでも足の力を緩める

と、ウエアがさらにクリを押し込んで絶頂してしまいそうだ。

（ど、どうしよ……足おろせない……！♡薄い布でクリずりずり擦られたらびりびりしちゃう……♡）

「ひ……んっ……んんッ……♡や、やめ……！」

私は快楽で膝ががくがく震えだし、もう立っているのもやっとになってしまった。ウエアが引っ張られてずりずりと

「あー。これはだめですね。ウエアがどんどんびちよびちよだ」

橘さんは私の身体をなんなく胸で受け止めながら、あそこをなぞっていた指を、ぐいとまんこの入り口に入れ込む。

「ひやつ、んう……ッ♡あつ、は、はいっちやう……♡」

「ウエアが薄く伸びるから、ウエアごと指が中に入っちゃいますね」

「だめっ……♡なんかざらざらすりゅ♡橘さんっ、指入れちゃだめえっ♡」

ウエアのざらざらとした質感でおまんこの入り口、曲げた指でGスポットを擦られる。

「あひっ♡んっ、ふう……あっ!?♡たちはなさんもうだめっ♡ごめんなさい♡テスト終わってください！」

「ダメですよ。もっとテストしないとわからないです」

（両手でクリもおまんこも一緒に刺激されてる…♡だめっ♡橘さんトントンって指使いうますぎっ♡）

「星川さん、クリをぎゅうぎゅうって布に引っ張られてずりずり擦られるのとGスポットをとちゅとちゅって、どっちが気持ちいいですか？」

「あ♡あっ、んんッ、ひう…ッ♡どっちもっ…♡どっちもきもちいいですう♡」

「ふふ、どっちもですか？えっろいなあ……感じている星川さん、可愛い」

橘さんは片手でGスポットを刺激しながら、ウェアを引き上げていた手を放し、私の顎を掴んでキスをした。

「あ、ん…っ♡…ったちばなさん…♡」

「…キスしたらまたきゅう♡っておまんこ締め付けて…気持ちいいですね？口、開けてください」

「あ、やっ……んちゅ♡んはあ……う…♡んんッ……あふう♡」

口内に侵入した橘さんの舌遣いが男らしくも優しく、私はさらに甘い気持ちになってしまう。激しいキスをしながら橘さんの指使いが激しくなり、Gスポットのざらざらをウェアでずちずちと擦り上げられる。

「ん、んうっ…♡た、たちばなさんっ、わたしすごくへんなかんじで♡このままだと……で

「ちやいます…っ」

「なにがでるんですか？テスト中だからしっかり教えてくれないと」

「やつ、だめっ♡でちやいます♡そんなのいえなっ……！！ひんぐんッ、きちやう…きちやいますう♡」